

私の宇宙観

ここでは、人生で1番大切な幸福とは何か、人間社会で最も醜い存在とは何か、死は無なのか有なのかの話、科学が目指しているものは何か、ということをお互いを筋道立てて、私の宇宙観と絡めながら述べていきたいと思います。

はじめに、人生で1番大切な幸福とは何か、についてです。まず、人が思い付く幸福の例として、趣味に没頭すること、お金を得ること、肉体的快樂、などが挙げられると思います。しかし、皆さんもこれらが1番大切な幸福とは考えないのではないのでしょうか。やはり、皆さんも人生で1番頑張るのは、仕事と結婚生活だと思います（学生の場合は、勉強 or 部活と恋愛です）。その日常を良くすることが、人生で1番大切な幸福だと、私も考えています。そして、本文の帰結でも、再びこの趣旨が現れてきます。

次に、人間社会で最も醜い存在とは何かですが、人がすぐ考えると思われるのが、連続殺人鬼、テロリスト、あるいはいじめをする人間などが挙げられると思います。もちろんこの中にもそういった存在の人は多くいるのですが、しかし、そういう人達が必ずしも最も醜いという訳ではないと、私は考えます。ではどういう人が最も醜い存在かという、愛は受け取るけれども、それを返そうともしないで、知的な刺激を受けてばかりいる人間です。知的な刺激を受けるとは、勉強をしたり、テレビを見たり、ゲームをしたりなどです。自分がよく読んでいる本の物語があるのですが、その本のテーマは、知能に固執して愛を受け取ったり返したりする能力を欠く者は、道徳的精神的崩壊をもたらし、精神病ないしは神経症を患うというものです。つまり人から愛を受けてばかりいて、精神の安定を図りながら自分の知能を高めている人が、人間社会で最も醜い存在だと私は考えているのです（先ほど述べた本のテーマで、愛を返す能力のない者は精神的崩壊をすると書きましたが、私は愛を受け取るだけでも精神の安定を図ることができると思っています）。

次に、死は無なのか有なのかの話についてです。現代は、死後は無だと考える人が多いようです。しかし、私は過去の哲学者の『無からは何も生じないし、また何であれ、無に帰することはありえない』という見解を元に、死について考察しています。そして、ここら辺りから、私の宇宙観を述べていきます。

一般的に人は（大人は）仕事をして、結婚して家庭を持って、人生の役割を終えて、最後死を迎えるという人生を送ると考えられていますが、その人生の結果みたいなものが、人の死んだ後に表れてくると私は考えています。そして「光」、人間にとって「光」とは何かというと、人間の心を明るくさせる物や事です。辞書にもそう書いてあります。そしてそれは何かというと「人間愛」と「知恵」です。つまり人は人のために愛を交わし合い、人の幸せのために知恵を使って働くという人生の結果として、死んだ後に「人間愛」と「知恵」を象徴

する「光」を放つものになると私は考えているのです。ここで、「人間愛」と「知恵」を発揮することとして、結婚生活と仕事以外にも勿論、人生にはあることを言及しておきます。また、私はスピリチュアルな志向を持っている訳ではないことを、述べておきます。ここで、人は光を放つものになるという表現をしている日本の小説や音楽の作品に触れておきます。

まず、宮沢賢治の小説の「よだかの星」について。そのあらすじを述べます。ストーリーは、よだかは醜い鳥であるなか、逆境に挫けそうになりながら精一杯生きて、最後死ぬ時に慈愛を思って、美しい光を放つ星に燃え上がるという内容です。この小説は、宮沢賢治の中でも、私の大好きな作品であり、私の考えもこの小説にヒントを得ています。

次に、日本のミュージシャンで、人は光を放つものになるという表現をしている私の好きな作品を紹介します。その作品を挙げると、Mr.Childrenの「掌」や「箒星」、オレンジレンジの「*～アスタリスク～」や「イケナイ太陽」、小室哲哉氏プロデュースの「Lights brought the future」といった曲があります。どれも私のお気に入りです。

これらの中で、Mr.Childrenの「掌」の歌詞を一部、抜粋して紹介します。

キスしながら唾を吐いて
舐めるつもりが噛みついて
着せたつもりが引き裂いて
また愛 求める
ひとつにならなくていいよ
認め合えばそれでいいよ
それだけが僕らの前の
暗闇を 優しく 散らして
光を 降らして 与えてくれる

私はこの歌詞の部分を次のように解釈しています。愛を求めてばかりでそれを返そうとしない行為は、相手を裏切る行為であり、暗闇に落ち込むことになってしまう。そこで認め合うように行為を改めれば、光が降る。以上が、私の解釈です。そしてこの解釈は、この後にする、先述した人間社会で最も醜い存在の死についての考察と類します。

このように、日本の小説家やミュージシャンで、人が光を放つものになるということをいった考えを提示されている方々は、実は多くいるのです。以上が、私が影響を受けた日本の小説と音楽の作品の数々です。

そして、先ほど述べた人間社会で最も醜い存在の死は、どうなるかを述べようと思います。私が思うに漢字とはよく出来ているもので、「地獄」という漢字があります。その意味は簡潔に、地面の下で苦しめられている様、さらに私なりの解釈を加えると、自分の重力で押しつぶされて地中深く暗闇の中で苦しみもがいている様、つまり「光」と時間を吸い込む苦し

みの象徴のブラックホールになると私は考えているのです。

もしこれが真なら、アインシュタインのした発見が世界を変えたというほど、すごいものだということを私は随想します。

最後に、科学が目指しているものは何かについてです。皆さんは、物理学者は（そして数学者も）自然世界全てを1つの式（タイムマシン）で表そうとしているというのは、聞いたことがあるでしょうか？ここで大げさにタイムマシンと書きましたが、これはSF映画に出てくるような肉体が時空を越える類のものではなく、また宇宙にはワームホールというのがある、そこに行くことによって過去や未来に行き来できるというものでもなく、紙と鉛筆でできるものです。そして、それが完成したら、宇宙の成り立ちが分かり、宇宙の過去も未来も明らかになると私は考えているのです。そして、私はそこから踏み込んで、宇宙の成り立ちを説明する根本原理が全て明らかになったら、宇宙はそれ以上成長しなくてもよいという感覚になるという考えを持っています。つまり、宇宙が膨張から収縮に転じるということです。宇宙の果てに人類の手が届いた瞬間であると。しかし、現代物理学では宇宙は永遠に膨張し続けるという説が有力ですので、すぐ後でこの説のことについても触れようと思います。

さて、私の宇宙の見方に話を戻しますと、こうして宇宙を振り出しに戻すことによって、宇宙で最も苦しんでいる象徴を救うことができるのではないかと、私は考えているのです。再述すると私の考えは、人類がその式を完成させた瞬間と宇宙が閉じるようになる瞬間が、必然なのか偶然なのか、たまたま一致しているというものです。収縮するとした宇宙が、膨張から収縮に転じる年月は、ビッグバンから150億年前後とも言われています。そして、現在の宇宙の年齢が約138億年ということを考えると、そろそろよい頃合いと言うことが出来るかもしれないと考えています。

前述した、宇宙は永遠に膨張し続けるということについてですが、これは私の考えが否定されるというよりも、ここまで語ってきて元も子もないのですが、人類がその式を完成させるのが不可能であるということを示唆しているのではないかと私は考えています。しかし私は、宇宙が収縮に転じる場合も考えに入れておきたい人間です。

宗教について。人が死んだ後に、どういう人が幸せの世界に行って、またどういう人が苦しみの世界に行くのかという基準が、宗教は間違っていると思います。私は、信仰心ではなく人生の内容が、その基準になると考えています。

話をまとめると、私たち人間は命を与えられて、どう人を愛して、どう知恵を使って人の役に立つ仕事をし、良い日常を送ることができるか。そして死んだ後に美しい光を放つことができるのかどうかを試されている。これを念頭に置いていけば、正しい幸せを得ながら人生を送ることができると思います。（終）